
恋愛なんてオカルトありえません!!

ヨネ@ハイテンション

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

恋愛なんてオカルトありえませんか!!

【Nコード】

N6508M

【作者名】

ヨネ@ハイテンション

【あらすじ】

学園生活に発生する恋愛ドラマ。

どうして恋愛ドラマは起こるのか？

不釣り合いなカップルはどうして存在するのか？

恋愛って一体全体なんざんしょ!？

学校と呼ばれる建物の中には、数百人からなる同年代の男女がほぼ均等数生息している。

そこでは、飽きる事無くさまざまなドラマが日々生産され続けている。

おっと、男女が均等数存在しない男子校にはドラマはないのか！
？ はたまた女子高ではどうなのか！？

いやいや、男子校には男子校の、女子高には女子高の、それはもう耽美かつ妖艶なドラマが縦横無尽に広がっているといって過言ではない！！

むしろ、そのようなアブノーマルな世界にこそ、真のドラマが存在しているのではないか？

男子女子などと言う二つの性別など不要なのだ！

男子が男子を愛して何が悪い！ 女子が女子を愛して何が悪い！
いいや、何も悪くない！！

ただ、全人類がそうなってしまうと、子孫が残せなくなって全滅してしまうだけのことなのである。

そう、たったそれだけの事なのである。

……話が大幅にそれてしまったようなので、元に戻すでしょう。

学校の中で起こるドラマといえば、男女の恋愛に尽きる！

『僕は君が好きだ！』

『私もあなたが好きです！』

『キスしよう！』

『はい！』

かなり簡略化したとはいえ、そのような会話がこの世界中いたるところの学校で行われていることは間違いない事実である。

しかし、しかしだ！

そんな事をいくら思い描いていても、現実になんかの行為にたどり着けない人間は多数存在しているのだ。

モテない男子、女子には学園内においてドラマは起こりえないのか？

答えは『否!!』

長々とした前置きを終え、かくして、物語は始まるのである。

「智久君、おはよう」

「ああ、おはよう紅葉ちゃん」

校門前で二人が交わした朝の挨拶は、それはごくごく自然なものだった。

二人は視線を交わすし、恥じらいの赤みを頬に浮かべながら微笑みあうと、歩調を合わせて校舎へと向かった。

一般的に考えて、この二人は恋人同士と呼ぶのが妥当だと言えるう。

まあ、あえて妥当と呼べないところがあるとするならば、二人の容姿の差である。

紅葉と呼ばれた女生徒は、身長は165センチほどのスラッとした体系の持ち主であり。長くて艶やかな黒髪を後ろで纏め上げポニーテールにしている。

一見、大人びた顔立ちに見えるのだが、時折垣間見せる表情はむしろ無邪気な子供そのものであり、それがいっそう彼女の魅力を引き立てていた。

そう、それらの情報から見ると、紅葉と呼ばれる女生徒は、普通に見目麗しい女子高生なのだ。

それに引き換え智久と呼ばれた男子高校生といえは……。

ボサボサのだらしない髪型に、少しばかりたるんだお腹、それでいて160センチあるかどうかの同年齢の平均を大きく下回る低身長。しかし、ここで漫画などのパターンでいけば、そんな野暮った

い風貌でありながらも顔立ちはかわいらしいシヨタ風!!　なんて事もあったりするのだが、現実是非情である。

一重瞼のくすんだ瞳に、お前は口の中に詰め物でもしているのか？　とでも言いたくなるような下膨れ顔。

そう、考えるまでもなく智久と呼ばれる男子生徒は、普通に不細工な男子高生なのだ。

そんな不釣り合いなカップルの、仲睦まじく登校する姿を目にしてしまった男子高校生Aさんは怒りに打ち震えながらこう述べてくれた。

「ええ、正直言って、あの智久って男は死んだほうがいいと思います。出来ることならば、今すぐにでも死んだほうがこの世の為だと思うのですよ!　そして、そのあと紅葉ちゃんは俺の彼女になるベキなのです!　そう、それは前世の記憶からつらなる運命なのです、デステイニーなのです!　彼女はドラゴンにとらわれた姫であり、私は勇者なのだああああ、イオナズン!!」

余談ではあるが、この男子高校生Aさんは、数分後に黄色い救急車に乗せられて学校をあとにしたのだった。

大量の投葉を受け、死んだ魚の目で戻ってきたのは、半年後だったそう。

ともかく、釣り合いというものが全く取れていないこのカップルは、周りから奇異の目で見られていたのだった。

そして、この奇異の視線を心地よく思う男がここに居た。

——ふふふふ、見られてる見られてる。みんな僕達を見てくれている。

その男こそ、視線を浴びせされている当の本人、智久その人であった。

智久は、まるで植物が太陽の光を浴びて光合成をするかのごとく、

奇異の視線を吸収しては、脳内に甘美な感覚を発生させていた。

正直、この智久という男は、紅葉というかわいい彼女が居なければ、まるで路上の石の様にクラスメイトに相手にされないような存在でしかなかった。

故に、智久は紅葉がいてこそ、その存在感というものを発揮することが出来るのである。

まあ、大まかにその存在感は『ウサイ』『豆腐の角に頭をぶつけて死ぬ』『己の分をわきましろ』等という、多数のクラスの男子からの嫉妬の眼差しからくるものであったのだが、それでも智久はそれを喜んで受け入れていた。

さて、ここで一部の人はおかしいと思うかもしれない。

容姿がよくないのだから、きっと紅葉は智久の性格に惚れたのではないだろうか？

しかし、ここまでの思考から察するに、智久の性格がいいとはとてもとても思え反しない。

今だって

——ああ、たまらない！　かわいい彼女を連れているということはなんと素晴らしい事なのだろうか！　あーっはっはっは！　かわいい彼女の居ない愚民どもよ！　嫉妬の炎で燃え尽きてしまおうがいいさあー！！

そんな気持ちを心の中に抱きつつ、気持ちの悪い半笑いの表情をしていた。

ここで智久の過去の物語の一つでも語っておこう。

智久は現在高校二年生である。

二年生であるということは、飛び級でもしていない限り、一年生だった時代があるということだ。

智久は一年生のころに、近所に捨てられたかわいそうな猫を何度も拾ってきていた。

そこまで聞けば、動物愛護精神にあふれる優しい男じゃないか！
等と賛辞の言葉を浴びせてしまいそうではあるが、実はそうではないのである。智久は拾ってきた猫をエアガンの動く標的として使用していたのである。

それはそれは動物愛護等ではなく、残虐かつ悪意に満ちた行動であつた。

しかも、迂闊にもその光景を一部のクラスメイトに目撃されてしまい、なんとかしてそれを口止めするために、智久は通常のお店では販売できないような特殊なエロ本を裏でクラスメイトに献上することによって、高校生活の崩壊を防いだのであつた。

つまりはなんら善人なのではないのである。

それなのに、それだというのに、教室に入り席についた今も、紅葉は智久に向かって満面の笑みで手を振ってみたりなんかしている。湧き上がる恋愛感情というものは、数字上のスペックなどでは計り知れないということなのだろうか？

あれなのだろうか、智久を包み込むオーラのようなものが、紅葉のハートを掴んでいるのだろうか？

答えは、すべて『否』なのである。

二人が付き合っているのには『カラクリ』があるのだ。

午前中の授業も滞ることなく終わり、昼休みとあいなる。

智久の机の前には、後ろ手に何かを隠し、モジモジと身をひねる紅葉の姿があつた。

「智久君、私ね、あのね、お弁当つくってきたんだあ。――もし良かったら、食べてくれるかなあ？」

後ろに隠していた紅葉の手から差し出されたのは、言わずもがな

彼女の手作りお弁当。

これこそ、学園生活を華やかに彩るアイテムの一つに他ならない！
そして、この甘い甘い申し出を断る男子が居るであろうか？

「うれしいよお！ いただきまーす」

勿論、そのような無粋な男子など存在するはずがないのである。

智久は、クマさんの絵が描かれているお弁当箱を勢いよく開けた。
そして、中身を一目見て絶句した。

「……」

数秒たって、ようやく思考を取り戻したところには、智久の席の周辺には独特な香りが漂っていた。

さて、お弁当の中身は何だったのか？

「か、かれー……」

そうなのだ、お弁当箱の中の半分は白米、そして残りの半分はカレールーだったのである。

カレーの匂いというものは、とても良いものではあるが、教室で嗅ぐとなるとそれはまた別物なのである。

「わ、わたし、お料理あまり得意じゃなくなつて……。でもね、カレーだけは得意なんだあ」

そう嬉しそうに言われてしまつては、智久の口から否定的な意見など言えるはずもなく。

「そ、そうなんだー。カレー弁当なんてとっても刺激的だよね、本当にある意味スパイシーだよ！」

少しばかり、皮肉をこめて言つては見たものの、紅葉にそれは伝わることはなく、きらめく太陽の様な笑顔を智久に向けて浮かべ続けていた。

そして、放課後。

「さあて、紅葉ちゃん帰りにどこかいこうか？」

智久が紅葉の机に両手をついて話しかけた。

「え？ 帰りに……どうして、私があなたとどこかにいかないといけないの……」

その言葉を発している時の紅葉の表情は、お昼休みの時の太陽のような笑顔ではまるでなく、苦虫を噛み潰したようなしかめっ面であつた。

「え……だって、あれ、ぼく達はつきあつ……」

そこまで言いかけて、智久は何かに気がついて言葉を飲み込んだ。「なんでもない、なんでもないんだ。それじゃ！」

そして、強引に話を切り上げると、猛ダッシュで教室を後にしたのだった。

智久は校門の外まで足を止めることなく走り続けた。

そして、人気の少ない路地に差し掛かるとようやく足を止めたのだった。

「なんてこつた……。もう効力が切れてるのか？ 前の時に比べて早すぎるじゃないか……。また、鶏の生き血を祭壇にささげないと……」

息を切らせて肩を上下させ、声も絶え絶えでありながら、智久は確かに間違いなくそう言ったのだ。

智久は足早に帰宅をすると、ただいまの挨拶も無くすぐさま自室に向かった。

智久の自室にはとても大きな鍵がついており、家族の自室への進入を防ぐようにしてあつた。

智久はポケットの中から鍵を取り出し扉を開け部屋に入ると、すぐさままた厳重に鍵をかけなおした。

そして自室に入った智久は、他のものに目もくれず一目散に押入れを開いた。

するとそこには……。

押入れの半分を占拠している怪しげな祭壇が存在していた。

一見インカ帝国から何かがよみがえってきたかのようなオドロオドロシイ装飾に包まれたその物体は、よくよく見てみると、すべてがチープな手作りで出来ていた。

石を削って作られたと思われる祭壇も、よくみればところどころセロハンテープで補修されているし、周りに飾られているネイティブなアクセサリーもよく見れば百円ショップで見かける類のものだったたりして物悲しさを誘った。

しかし、驚くべきところはそこではない。

祭壇の中央には、首をかき切られた一羽の鶏が血を流しながら横たわっているではないか！

さらにその上には、一枚の写真が飾られていた。

そう、それは紅葉の写真である。

「おかしい……。この黒魔術は一回につき十日は効力が持つはずだったのに、まだ今回は一週間もたっていないんだぞ……」

どうして、こんな不釣り合いなカップルが存在したのか？

その謎を解く答えがここにあった。

つまり智久は紅葉に黒魔術をかけることによって、気持ちを操り彼女にしていたのだったのだ！

智久が偶然通販で手に入れた『昆虫並みの脳みそでも出来る黒魔術！ 君も黒魔術で彼女をゲットだぜ！』に書かれている方法を用いることにとって、一回の鶏の生贄で約十日間相手の気持ちをこちらに向けることが出来るのだ！

智久は現在に至るまで、それを十数回繰り返すことで、紅葉のハートをゲットし続けてきたのである。

恋愛には努力が必要等というのであるのなら、これはかなり間違った方向ではあるがとんでもない努力であると言えよう。

翌朝、智久は校門の前で紅葉がやってくるのを今か今かと待っていた。

そして、その姿を発見すると小刻みにジャンプしながら大きく手を振ってみせた。

「おはよう、紅葉ちゃん」

「……おはよう」

そこに居たのは、まるで汚いものを見るような目でこちらを見る紅葉の姿だった。

「え、あれれ、どうしちゃったのかなあー紅葉ちゃん」

「あの、下の名前でなれなれしく呼ぶの止めてくれますか？　てか、なんかあんたから生臭い臭いがするんですけどーマジでー。ほんと向こう行ってくんない？」

「え、え、え、ちよつと待ってよ、俺は紅葉ちゃんの彼氏の……」

「はあ？　あんた頭の中にカブトムシのさなぎでも飼ってるんじゃないの？　どうして、私があんたと付き合わなきゃならないのよ！　それに、私にはちゃんと愛するダーリンが居るんだから！」

「え……」

脳みその中にカブトムシのさなぎが本当に居るかのように、智久の思考回路は異常をきたしていた。

黒魔術の儀式は昨日失敗することなく確実に行ったはずである。

なのに？　何が起きているのか？

今日の前に居る紅葉ちゃんのリアクションは、まるで黒魔術にかかってなどいない、素のリアクションなのである。

いや、これが智久に対する素のリアクションだと言うのも、可哀想と言うか哀れというか……。

「あれ……ちよつと待てよ」

智久の頭の中のカブトムシのさなぎが羽化をしたのか、智久は紅葉の言動の中におかしなところがある事に気がついた。

「あの、愛しのダーリンって言ったよね？　それって、僕のことじゃ……」

「そんなわけないでしょ!!」

紅葉の鋭い眼光はまるでレーザービームのように智久の身体を貫いた。

「あんたホントに馬鹿じゃないの!! ——あ、ダーリンがきたあ」

言葉の前半と後半では、まるで声のトーンが違っていた。

紅葉がダーリンと呼んだその声の先にいた人物、それは……。

「ぐ、ぐへへへへっ、紅葉ちゅわん、おはよおお」

そこに居たのは、隣のクラスでも有名な不細工男子。権三郎けんざうであった。

ニタニタといやらしい笑みを浮かべたニキビだらけの顔は、鼻根目にもさわやかという存在からは十光年は軽く遠ざかっており、さらには身体から牛の糞のような異臭を発していた。

「おはようゴンちゃん、えへへへ」

先日まで智久へ向けられていたはずだった紅葉の太陽のような微笑は、今はすべてゴンちゃんなどという不釣り合いなニックネームで呼ばれた権三郎へと向けられていた。

その光景を目にした智久は、ゆっくりとその場に膝から崩れ落ちた。

そんな智久の横を二人が手をつないで通り過ぎようとした瞬間、権三郎は小声で智久に耳打ちした。

「ふふふふ、鶏じゃ弱いんだよ。牛一頭捧げないとね……ぐふふふ」
牛一頭……。確かに権三郎はそう言ったのだった。

懸命なる皆さんならわかるだろう。

このゴンちゃんこと権三郎も智久と同様の黒魔術を駆使していたのである。

しかも、家が畜産を営んでいることを利用して、牛を一頭祭壇にささげるという荒業を成し遂げていたのだ。

牛さん本当にごめんなさい。

しかし、しかしだ！好きな女の気持ちを得るために、牛を一頭捧げる男がいるだろうか？

居たとしても、未開のサバンナに住むどころかしこの部族にしか存在しないのではないか！

いいや、ここに、この日本に、今ここに居るのである。

それこそが、ゴンちゃんこと権三郎の恐るべし恋愛パワーなのだ！

智久は両膝をついた姿勢のまま、完全に自分の愛（黒魔術）が敗北したことを知った。

「くそっ！くそおおお！鶏じゃ愛（黒魔術）が足りなかったんだー！！こうなったら……」

翌日、智久はなけなしの貯金を全額下ろして、アフリカへと旅立った。

アフリカ像を一頭生贄にささげるために……。

さて、皆さん周りをみまわして御覧なさい。

そこらかしこに居るカップルたちは、本当は黒魔術によって出来ているものかもしれませんよ？

END

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n6508m/>

恋愛なんてオカルトありえません!!

2011年3月5日08時25分発行